

第12回ちばてっく会報

Chiba Teaching English to Children

“ちばてっく”は児童英語教育をみんなで考え、意見交換を行い、研鑽していく会です。

当日は吹雪ともいえる悪天候の中、非常に多くの方が参加してくださいました。

(1) 『ALTの授業で大丈夫?』

木更津市立富来田中学校 高橋 健司先生

初めに、現在千葉大学大学院1年生として、物井先生の研究室に所属している高橋先生に、英語活動の実践についてお話していただきました。

現在小学校で行われている英語活動の多くは、ただ単にゲームを楽しんだり、チャンツを言えるようにするためのものがほとんどであり、生徒たち本人が「どういうときに言うのか」「どのように使うのか」について考えたりする機会が少ないということを皮切りに、生徒たちに積極的に「考えさせる」ことをテーマに発表していただきました。

高橋先生が小学校で実践された活動を、参加者の方々が体験する機会もあり、講演は終始賑やかな雰囲気の中行われました。今回紹介されたゲームは、進化ゲームやじゃんけんレボリューション、数字を使った陣取りゲームなどでした。それぞれに利点があるのはもちろんですが、たとえば陣取りゲームの場合には、「見てる側の人たちは活動に関わりが少ない」というものや、勝ち負け・速さばかりに気を取られてしまうために、「生徒たちがはっきり言ったのか言わなかったかわからない」など、取り入れる際に気をつけなければならないポイントがあることにも触れられました。生徒同士で教え合う機会をつくる、ペア活動などをバランスよく取り入れていくことで、ある程度解決できるものあるとのことでした。

また、小学校では How are you?の挨拶に対して生徒が I'm fine. などと答えることが当たり前になっていますが、それではただ言葉の練習だけになっており、自分の気持ちを表すお気に入りの言葉を言えるよう、自分の言葉に気持ちを込めることができるように、意味のある言葉を増やすことが大事であるとのこと指摘がありました。I'm happy などの反応に対しては、そこに「どうして?」と返すことで、本人や周りの子どもに、「こういう時に使うのか」ということを気づかせ、また、その気づいたことに対して評価を与えることも大切であるとのことでした。今後は、ただ漠然と英語活動＝楽しいゲームの時間という認識を改め、その時間を通じて子どもたちが「考えてみる」活動を設けていくことが重要になってくると気づかされました。



(2) 『小中一貫校における英語教育の実態』

品川区立小中一貫校伊藤学園 矢野聡 先生

以前西垣先生の研究室に所属されていた矢野先生には、品川区における小中一貫教育の現状と課題についてお話をいただきました。

【小中一貫教育とは】

社会的背景、小中学校の現状、児童・生徒の現状、品川区におけるプラン 21（平成 11 年策定）の推進として始まった。連携ではなく一貫である。小学校 1 年生から中学校 3 年生までが通う施設一体型一貫校と施設分離型連携校の 2 種類あるが、後者は教師の移動が非常に困難。品川区には独自に小中一貫教育要領があり、そこ



に書かれている内容は 1 年生から英語を教科として扱うことや、5 年生からは教科担任制になること、道徳と特別活動と総合的な学習を合わせた市民科という科目を週に 3 時間行うことなどが記載されている。学年組織は 1～4 年生は低学年団、5～7 年生は中学年団、8～9 年生は高学年団となっていて各団をそれぞれの学団長がまとめている。

【英語教育】

9 年間をひとつのまとまりと考える。1～4 年生は「親しむ」、5～7 年生は「身につける」、8～9 年生は「活用する」を目標にしている。特徴としては①独自教材の使用、②1 年生からの評価基準の設定、③小学校での文字指導の徹底、④4 技能をバランスよく指導、の 4 点があげられる。伊藤学園では中学校の先生が小学校英語の教室に来て授業をしたりしていて、互いに高めあっている。教材の一つとして、西垣先生が開発された英語カルタを使っている。このカルタは多様な使い方があるので、様々な学年でも活動が可能である。

【成果】

- ・ 6 歳から 15 歳までが在籍するので、身近な手本や到達目標がある。
（施設一体型の効果）
上級生の自尊感情が刺激される。
お互いを知ることができる。（教師同士の交流も）
子どもの成長を豊かにする。
- ・ 一貫校として系統性のある行事や指導ができ、異学年の交流を意識しているため児童
- ・ 生徒の育ちが膨らみ教育効果が高まる。

【課題】

1 小中一貫教育スタイルの定着が必要である。そのためには日ごろからの改善と工夫が必要である。

2 組織が大きく、小回りが利きにくい。教員数は講師も含めると 100 人以上いるので、職員会議も大変。

矢野先生には 2 年生と 6 年生の授業風景のビデオもを見せていただき、実際の小中一貫教育とはどのようなものなのかという、大変貴重なお話を伺うことができました。

(3) 『シンガポール小学校視察と国の成長の秘密』

あぜりあ Language School 勝山 ひとみ先生

数々の国へ視察に行かれている勝山先生からは、ご自身の体験をふまえ、今回はシンガポールの経済成長や教育制度、さらに公立小学校での英語教育の状況についてご講義いただきました。



【シンガポールの成長の秘密】

シンガポールは現在、18.8%の経済成長率を記録している（2010年4月～6月四半期）。なぜシンガポールがここまで成長を遂げているのか、その理由についてです。

成長の理由としては、①歳出の20%を占める教育予算の高さ、②基本言語を英語とするバイリンガル政策、③数学、科学、技術教育に尽力、④表現力や、効率的な教え方の重視、⑤中国語は北京語を奨励、⑥50以上の国と租税条約を締結、⑦知的財産法の厳格な施行、⑧IT、ファイナンス、ロジステックなどのサービスの集中化、などが挙げられるということでした。

【シンガポールの教育制度】

シンガポールの初等教育及び中等教育についてです。

・初等教育(6年間) 1～4年の基礎段階では、主要科目として母国語の他に英語を学習する。その後、5～6年のオリエンテーション段階に進み、オリエンテーション段階では学習能力別に振り分けられており、終了時に卒業試験を受ける。

・中等教育(4～5年間) 特別／快速コース4年間と普通コース4～5年間に分かれる。特別／快速コースは、ポリテクニクやジュニアカレッジ後に大学へ進学できる。普通コースは、学術系は5年間、技術系は4年間あり、技術教育研修所や職業実習後、就職となる。

【シンガポール公立小学校の視察】

勝山先生が視察された Queenstown Primary School についてのご報告でした。

Queenstown Primary School は、共学の公立学校であり、中心地から近いマンションが多い地域にある。母国語は、中国語、タミール語、マレー語である。教科書はなく、最近電子黒板の導入がされた。特に英語に関しては、LSE(Learning Support English)という、英語を不得意とする生徒のための特別授業が展開されている。1～2年生は週に1回、3年生は毎日授業があり、入学以前に英語に触れる環境がなかった子ども等を対象としている。指導者は、専任または退職された先生である。

【日本の小学校英語への提言】

勝山先生は、平成23年度から5～6年生に導入される小学校英語を、他のアジア圏の多くの国と同じように、早い時期に1年生からの導入に変更し、教科担任制を導入することや、諸外国の状況を踏まえ、All English での指導を推薦されました。

(4) 『小学校外国語活動で大事にしたいこと』

東京学芸大学 粕谷恭子 先生

今回のちばてっく最後の発表者として、東京学芸大学の粕谷先生にお越しいただき、今後の「小学校外国語活動で大事にしたいこと」という題で発表していただきました。一貫したテーマとして、言葉の姿を「意味(思い・心の動き)」・「音声」・「文字」という同心円ととらえ、小学校においては時間数の関係から、同心円の中心の「意味(思い・心の動き)」・「音声」が一致した豊かな言語経験をさせることを大切にしていこう、というものでした。



小学校での外国語活動の指導に不安を持たれる先生方もいらっしゃると思いますが、英語ができないという先生も無理に英語でいろいろなことを言おうとせずに授業中に使う英語表現を精選してしまうことが上手く授業を行う方法となるそうです。そして、担任の役割として、心が動く題材選びや活動をデザインすること、丁寧に英語を使うお手本となること、子どもにとって超えやすい身近なお手本となることが挙げられていました。子どもに教えるにあたっては、言葉も文法も大切であり、通じれば良いと聞き直らず、将来子ども達にどのような言葉の使い手になってほしいかを考えて取り組むことが今求められているということでした。活動にあてる時間が少ないからこそ「味あわせ、染み込ませる」ようにその言葉に触れさせていくことが大切であって、ゲームなどの一時的な盛り上がりや競争に頼るのではなく、子どもたちが言おうとしている、言いたいと思っていることに気づき、そういった動きを認めていくことも今後我々に求められる資質の一つであるというご指摘も頂きました。

閉会後の懇親会にて活発な意見交換会が行われました。

次回の開催は2012年2月(予定) HPを参照:

<http://www.h2.dion.ne.jp/~azalea/ChibaTEC.htm>

問い合わせ: ちばてっく (JES 千葉支部)

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学教育学部英語科

E-mail: chibatec@yahoo.co.jp, (2011年3月発行)

TEL: 043-290-2678(本田勝久研究室)

